

聖書：創世記 30：25～31：16

説教題：父たちの国に

日時：2024年2月25日（朝拝）

前はレアとラケルの出産競争の様子が記されました。姉のレアからは6人、レアの女奴隷からは2人、ラケルの女奴隷からは2人、そして最後にヤコブが愛するラケルからは1人の男の子が誕生しました。このラケルの出産が一つのきっかけとなってヤコブは故郷に帰ることを考え、ラバンに願い出たことから今日の箇所は始まります。しかしヤコブは自由の身ではありませんでした。彼は無一文でこの地に逃亡して来た者であり、この家で拾われ、養われているこの家のしもべです。そんな彼がラバンの娘たちと、その間に生まれた子どもたちを連れて勝手に出て行くことはできません。ラバンの許可が必要です。しかしラバンはヤコブを手放したくありませんでした。ヤコブはラバンの下で良く働きました。26節で彼は「あなたに仕えた私の働きは、あなたがよくご存じなのですから」と言っていますし、29節でも「私がどのようにあなたに仕え、また、あなたの家畜が私のもとでどのようなであったかは、あなた自身がよくご存じです」と言っています。それはラバンも認めるどころでした。そこでラバンは新しい報酬と引き換えに、なおしばらくヤコブを引き止めておこうとします。ヤコブも財産を持たずに出発することはできませんので、なおしばらくラバンの下で働くことを受け入れます。そこで「あなたに何をあげようか」とラバンに問われてヤコブが提案した内容が32節にあります。「私は今日、あなたの群れをみな見て回らしましょう。その中から、ぶち毛と斑毛の羊をすべて、子羊の中では黒毛のものをすべて、やぎの中では斑毛とぶち毛のものを取り分けて、それらを私の報酬にしてください。」当時ヤコブが住んでいた地方では羊は白で、やぎは黒が一般的だったようです。そこでヤコブはそうでないものを私のものとしてくださいと言います。つまり羊は白でないもの、ぶち毛と斑毛のもの、また子羊の中の黒毛のもの。やぎについては黒でないもの、つまり斑毛とぶち毛のものです。これらは全体から見ればごく少数であり、ヤコブの願いは慎ましいものと言えます。多くは要求していません。これはラバンからしてみると都合でした。何だ、そんなもので良いのかと拍子抜けするような提案でした。そこで彼は34節で「よろしい。あなたの言うとおりになればよいが」と言います。

そう述べてラバンはすぐさま対策を講じます。35節に「ラバンはその日、縞毛と斑毛の雄やぎと、ぶち毛と斑毛の雌やぎのすべて、すなわち身に白いところのあるもの

のすべて、それに、黒毛の子羊のすべてを取りのけて、息子たちの手に渡した」とあります。そして自分とヤコブの間に三日分の距離を置きました。本来これはヤコブのものとなるはずのものであり、ヤコブとしてはそれらのものをスタートとして自分のものを持つと考えていたでしょう。ところがラバンはそれらのものをさっさと取ってしまって、ヤコブにはゼロからのスタートを強いたのです。すでにラバンはヤコブをだましましたが、彼がいかにケチでずる賢い人間であるかがここにも示されています。

さて問題はヤコブがこれにどう応答したかということです。スタート時点で彼のものとなる縞毛、ぶち毛のものは全くありません。どうやって今後それらのものを得ることができるのでしょうか。そこで彼が取ったのが、私たちが読んで驚くような方法でした。37～38 節に「ヤコブは、ポプラや、アーモンドや、すずかけの木の若枝を取り、それらの白い筋の皮を剥いで、若枝の白いところをむき出しにし、皮を剥いだ枝を、群れが水を飲みに来る水溜めの水ぶねの中に、群れと差し向かいに置いた。それで群れのやぎたちは、水を飲みに来たとき、さかりがついた。こうして羊ややぎは枝の前で交尾し、縞毛、ぶち毛、斑毛のものを産んだ。」とあります。これは一体何でしょうか。これは妊娠時に母親が抱いたイメージが生まれて来る子どもの色に影響を与えるという考えに基づくものようです。白いものを見て交尾した動物たちは、少なくとも白が混じった縞毛やぶち毛の子を生む。一方、白い羊については、40 節にある通り、縞毛のものと黒毛のものと向き合うように置きました。これもいつも見ている色が影響を与えて、やがて白い羊から黒が混じった子が生まれるという考えのようです。これは本当なのでしょう。ここの理解の仕方には三つあるようです。一つ目はこれは科学的に支持できるという理解です。ヤコブは羊飼いをしながら、こうなることを経験的に知っていた。だから彼はその方法をここで用いたという理解です。二つ目は、これは当時一般に信じられていた考えで、簡単に言えば迷信であるという理解です。ヤコブもそれを信じて行ったと見るものです。そして三つ目はこれは主の指示によるという理解です。今日は 31 章最初の部分も一緒に読みましたが、そこでは縞毛やぶち毛のものの誕生に関わる主の言葉があったことが語られています。だから枝の白いところを剥き出しにしてやぎに見せるという奇妙な方法も実は主が指示されたことだったのであるという理解です。さて皆さんはどれを選ばれるのでしょうか。結論から言えば私は二番目が適切ではないかと思えます。一つ目の科学的に成り立つという考えは難しいのではないかと思えます。もしそうなら今でも母親が頭に思い描く色を操

作することによって、その色が強く出た子どもを産むことが可能であることになってしまいます。さすがにこれを取る人はそう多くないと思います。一方、三番目の理解を取る人たちはある程度います。この場合、ヤコブが枝の皮を剥いで白い部分をやぎなどに見せた行為は主の指示に従う信仰の行為と見られることとなります。しかしはっきりそうは書いておらず、また特別その暗示もないところで、そこまで言い切るのは少し危険であるように思います。むしろ 30 章の記録はヤコブがラバンに対抗して何とか自分のものを増やそうと人間的な知恵に頼って行ったこととして読む方が自然ではないでしょうか。2 番目の理解を取る場合、問題となるのは、なぜヤコブは迷信的に行動したのに事は彼が願った通りになったのかということです。なぜ主はそのようにされたのか。もし彼のしていることが正しくないから、主は成功しないように導くべきだったのではないか。それによってそれは間違いであることを彼に示すべきだったのではないかということです。確かに正しくない行動を取った人には一切祝福を与えないという道もあると思います。しかしです。祝福を受けるためにはいつも私たちが正しくなければならぬというルールを定めるべきでしょうか。私たちが正しくない限り主は一切私たちを祝福すべきでないとするべきでしょうか。そうだとしたら、常に正しく歩んでいるわけではない私たちはいつになっても祝福を受けられないということになってしまいかねません。むしろ日々罪を犯し、何らかの問題を神の前に持っている私たちを神は永遠に祝福できないということになってしまいます。ですからここは次のように見るができると思います。ここでのヤコブの行動は決して正しいものではなかったが、それにもかかわらず主は驚くべき恵みをもってヤコブの羊ややぎが増えるようにしてくださった、と。

私たちの歩みを振り返っても自分が今日こうして主への信仰に立つ歩みができているのは自分が立派に歩んで来たからなのでしょう。むしろすべてをご覧になる主の前では色々な罪や問題があったのに、主がふさわしくない恵みをもって私を導いてくださったことがあったのではないのでしょうか。また今日もそうであると言えるのではないのでしょうか。私たちもヤコブと同様、不相応の恵みをたくさん受けて来た者たちではないのでしょうか。この点を間違えると私たちは逆に自分を誤って誇ることもつなげます。私が今日このように祝されているのは、私がそれに値する歩みをして来たからなのだ、と。ヤコブのようにある種のテクニックを活用し、計画を立て、実行し、努力した。そのおかげで私は今日の私になったと。しかし今日の箇所を描かれているのはおそらく迷信的で決して正しくはないヤコブです。そうであるにもかかわらず

ず主は恵みをもって彼を導いてくださったということがここに書かれていることであるとされます。

41～42 節を見ると、さらにヤコブは強い群れにさかりがついた時、白い枝を置き、逆に弱い群れにさかりがついた時には、そうしなかったとあります。こうして弱いものはラバンのものとなり、強いものはヤコブのものとなりました。果たしてこの行為はどのようなのでしょうか。絶対に間違いであるとまでは言えないかもしれませんが、クリーンであるとは言えないという気持ちを誰もが持つのではないのでしょうか。自分の得になることを一生懸命考えて行う従来のヤコブの性質がここに現れていると見る方が自然でしょう。そんな彼が 43 節にあるように祝福されたのは主がこのやり方を称賛したからではないのです。むしろこんなヤコブであるのに、主が恵みをもって彼を祝福されたという驚くべきことがここに記されているのだと考えられます。

さて 31 章に入ってヤコブはラバンの息子たちから妬みと疑惑の目で見られるようになります。ここまでの間に約 6 年の月日が経過したようです。またラバン自身の態度も以前のようなではなくなっていることをヤコブは知りました。そんな時、主の言葉がヤコブにありました。3 節：「主はヤコブに言われた。『あなたが生まれた、あなたの父たちの国に帰りなさい。わたしは、あなたとともにいる。』 父たちの国とはどこでしょうか。それはカナンの地です。しかしカナンはまだ全然父たちのものになっていません。約束として与えられているだけです。ですから「父たちの国に帰りなさい」とは、父たちが受けた約束を継承する者として約束の地に帰り、そこで生きなさいという意味に他なりません。約束を待ち望む信仰にヤコブが生きることを主が心にかけて、このように働きかけてくださったのです。

これを受けてヤコブは妻たちを呼び寄せて説得します。ヤコブは彼女たちにラバンに力を尽くして仕えて来たこと、しかしラバンは報酬を何度も変えたこと、しかしそのたびに神が私を守り、私に害が及ぶことのないようにしてくださったことについて述べます。ラバンが「ぶち毛のものがあなたの報酬になる」と言えば、みなぶち毛のものを産み、ラバンが「縞毛のものがあなたの報酬になる」と言えば、みな縞毛のものを産んだと。また 10 節以降では神の使いが夢の中でヤコブに語られたことが述べられています。ここから分かることは縞毛やぶち毛や斑毛のものが多く生まれたのは主のみわざであるということです。ヤコブの迷信に基づく人間的なテクニックの

おかげではなかったのです。注目すべきことは、ここでヤコブは妻たちに 30 章で自分が行ったわざのことは一切述べていないことです。彼はこの地を去ろうとするこの時には、すべてを導いてくださったのは主であったと告白しています。正しい視点で物事を見、また表現するように導かれています。

そして主は 13 節で最後に次のように言われました。「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。」 ベテルの神だと言って、主が思い起こさせているのは創世記 28 章の出来事です。28 章 15 節で主はこのように約束されました。「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」 主がああ時の約束を覚えてくださっています！その約束に基づいて主はこれまでもヤコブを守ってくださったのですし、その約束の通り、彼を連れ帰ろうとしています。ヤコブにはなお多くの欠点や不完全さがあるにもかかわらず、主がご自身の約束に忠実であられて彼を導いてくださっていたのです。

14 節以降ではラケルとレアも同意します。彼女たちも父ラバンの不正を認めます。そして今やヤコブに信頼して、「さあ、神があなたにお告げになったことを、すべてなさってください」と言います。こうして次回いよいよ約束の地、父たちの国への帰郷の旅に出発することとなります。

以上、今日の箇所には誰もが疑問を覚えずにいられないヤコブの姿、首を傾げざるを得ない彼の姿が描かれました。それにもかかわらず恵みをもって導かれた神のお姿が記されました。そして最後の部分で明らかにされたのは、以前の約束を心に留めて、その実現のために心を砕き、働いておられた主のお姿でした。私たちも同じだと思います。私たちも必ずしも主の前に正しい姿を示して来たわけではなかったのに、むしろその反対なのに、主は約束に真実でいてくださり、大きな恵みをもって今日の私の歩みをも導いてくださっています。このヤコブの記事を通して、そのような主の恵みが自分のこれまでの歩みにもあったこと、また今日の歩みにもあることを覚えて、心からの恐れと喜びをもって主を礼拝する者とさせられたいと思います。

もちろんこの神の恵みは私たちの歩みがどうでも良いということの意味するもの

ではありません。30章におけるヤコブの姿は正しいとは言えないものでしたが、31章で彼はそれまでの歩みを振り返って、この祝福はただ神のおかげだと述べています。まだまだ不完全な人間であるとは言え、彼は少しずつ導かれています。この後、大きな霊的導きを受けるのは32章です。まだそこまでは行っていません。しかし以前からすれば随分と前進しています。恵みの中で彼は確かに導かれています。私たちも主の恵みを受けている者たちとしてさらに成長する者たちでありたいと思います。私たちが祝福してくださるのは主なる神です。主がご自身の約束に基づいて私たちを最後のゴールへと導くため、今日も大いなる恵みをもって働いてくださっています。その神を見上げて心から感謝し、私たちの感謝を一層神の言葉に注意して聞き、その道に歩むことにおいて表し、いよいよ主の祝福に豊かにあずかる信仰の民、神の民の歩みへ導かれて行きたいと思います。